

野の花新聞

No. 11 2011年4月号 「別れ・次兄」

みなさま、こんにちは。

野の花の みなかた あきこ です。

東日本大震災のあまりの被害の大きさに、心の痛む毎日です。

一日も早く 安心と安全が回復されますよう、祈って止みません。

心はつながり、寄り添っています。力と温かさをお届けすること、物心両面で支え続けること、を心に銘じ、行動していこうと思っています。

さて、今月は、テーマの選択にずいぶん迷いました。こんな時だからこそ、ほっとできる話をしたいとも思ったのですが、兄たちとの別れに、今だからこそ、きちんと向き合おうと決めました。どうか、お付き合いくださいませ。



次兄は先天性の心臓の障害のため、スポーツ万能でありながら、運動制限がありました。負けず嫌いで、勉強でもスポーツでもたいてい一番を取って来ていましたが、呼吸が苦しくなったり、唇が真っ青になったりして、安静にせざるを得ないことが時々あり、そんな時の兄の悔しそうな顔は 見ていてほんとうにつらいものでした。国立大学を受験した時のことです。成績優秀だったにもかかわらず、健康診断で、入学はできないと言われたと 兄が泣いていたのを覚えています。私立の大学に進学しましたが、悔しい気持ちは消えることはなかったでしょう。大学2回生になった時、兄の心臓は このまま生活を続けていくことが難しいところまで悪化していました。手術の必要があるけれど、成功の確率は50%と。兄に どんな葛藤があったか、その頃小学生だった私には 推し量るべくもありませんでしたが、「健康な体になって、国立を受けなおす」と言う兄の目から落ちた涙が すべてを語っていました。手術の日は、私の林間学校の前日でした。手術室に入る前、兄は家族一人一人に話をし、笑顔で手を振っていきました。私には「あっこは ものを創るのが得意やな。ひとが真似できへんことができると思うで」と。その夜、林間学校への楽しみと、兄の手術が終わったという連絡の無いことへの不安を抱えて布団の中にいた私を、母が起こしに来ました。「兄ちゃんが危ないって。病院に行くで」母の声は震えており、私がそれ以上質問してはいけない響きがありました。兄の病室のベッドで一人待つことになった私は、朝まで神さまにお願いをしていました。助けてください、私は何でもしますから。夜が明ける頃、母が迎えに来て、手術室に連れて行かれました。たくさんの管につながれた兄と、あわただしく動いている医師と看護婦達、そして「もう あかん」と言って 医師が兄の体から何かの管を抜き・・・手術は成功したのだそうです。けれども、兄の体力は もう残っていなかったのです。

兄達が私に残していったメッセージ・・・
生きること。感謝して生きること。

くう

なんだか・・・

油断しすぎの顔ですよ くうちゃん・・・

